

平成 27 年 7 月 23 日

小野市議会議長 前田 光教 様

民生地域常任委員長
高 坂 純 子

行政視察報告書

先般、実施しました 民生地域常任委員会 行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成 27 年 7 月 8 日（水）～平成 27 年 7 月 10 日（金）

2 視察メンバー



富田課長（事務局）・川名善三・山本悟朗・山中修己
久後淳司・富田和也
藤原章（副委員長）高坂純子（委員長）
小林千津子（副議長）

3 視察先及び調査内容

- （1）山口県下関市（人口：約 27 万 6 千人、面積 716, 17 km²）
ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について
- （2）福岡県糸島市（人口：約 9 万 9 千人、面積：216, 15 km²）
農業農村 6 次産業化支援事業について
- （3）大分県豊後高田市（人口：約 2 万 3 千人、面積：206, 65 km²）
豊後高田昭和の町づくりについて

4 調査結果

【第1日】

山口県下関市

人口：280,947人、面積716,17km²

《視察項目》

ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について

＜担当説明者＞

- ・農林水産振興部農林整備課 課長 上野晃
- ・農林水産振興部農林整備課 下関市有害鳥獣対策室課長補佐室長兼務 来島弘幸

《視察内容》

※ジビエ有効活用推進事業について

下関市は合併により面積（716・17km²）の3分の2が森林となり、中山間地域などの人口減少・農業従事者の著しい高齢化に伴い、野生獣による農作物被害が深刻化している。



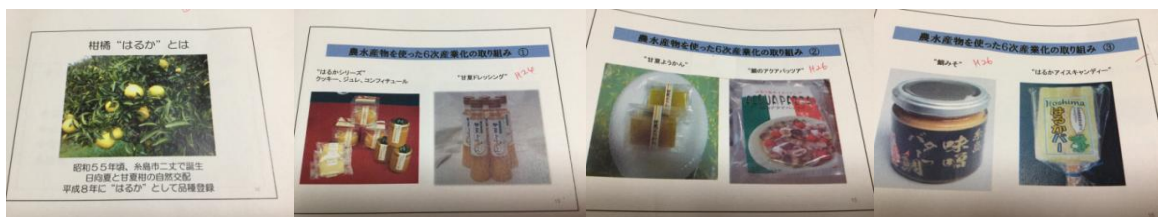
地域における有害獣被害を軽減する為の仕組みを構築する「基本計画策定」を作成し、下関型ジビエ有効活用モデル＝捕獲処理機能＋加工販売機能＋地域ぐるみの有害鳥獣被害対策機能として、北部中山間地域に平成25年「みのりの丘ジビエセンター」を設立した。年間計画処理頭数600頭。指定管理者が業務を行うが、シカソーセージ、イノシシ丼など、ジビエの開発販売を行っている。

○ ジビエセンターとジビエの販売について

・年間維持費 指定管理業務にかかる費用 53,439,000円(猟師がそこへ持って行ってそこで捌くという基本協定) 下水処理にお金がかかる。(1日MAX5頭 新鮮な物なので時間との戦いである)

解体主が売るのは自主事業になる為、年間利益は自主事業なのでトントン又は赤字。今後はブランド化して消費の拡大を行う計画。売るための側面からの協力として、試食会での材料提供。食べる会のPR活動。

ジビエ料理教室の開催など行っている。



※有害鳥獣対策について

鳥獣被害対策実施隊を設置しており、捕獲隊隊員が積極的に対象鳥獣保護に取り組む事に同意すれば、実施隊員としている。(現在 279 名) 報酬は年額 2,000 円と出勤時の旅費を支給している。尚、捕獲奨励金も出している。

予防策として、最近増えてきたサル被害に対しては被害農家に対し、モンキードッグ養成訓練を呼びかけ、希望者には半年間の訓練を実施している。

○猟銃免許に関して

猟銃を持たない人が増えている為「狩猟の魅力丸わかり」といったフォーラムも開催している。行政の側は銃を使って獲って欲しい。警察の側は銃を持たせまいとする。銃保持者も近所や家族からよく思われないので銃を保持したくない。危険も伴うのがなによりもの要因。銃に頼らず捕獲の技術を開発していくのも 1 つの方法である

《所 感》

センターの公募に手を挙げたのが 1 社(市内の精肉店)だった。施設は作るがジビエの有効活用をして貰える指定管理者が見つけれられるか。シナリオをきちっと作ってから行わないと大変だとアドバイス頂いた。

試食会を開いてもヘルシーで美味しいとの答えが、ほぼ 100%だが、価格設定が難しい事を特に感じた。ヨーロッパなどでは高級食材として重宝されているので、今後そのような流れになればと期待をかけた。



また、小野市でも近々の問題として上がっている、有害鳥獣対策だが、やはりなかなか進まないのが現実であり、日本全国が深刻な問題となっている。

猟銃免許取得者、捕獲隊員の年齢層をみても、小野市と同じように高齢化である。人口減少、耕作放置などで、有害鳥獣が増える中、新しい捕獲技術の必要性を感じた。

【第 2 日】

福岡県糸島市

人口：98,435 人、面積：216,15 km²)

《視察項目》

農業農村 6 次産業化支援事業について

<担当説明者>

糸島市産業振興部農業振興課長 岩永剛彦

糸島市産業振興部農業振興課農政係長 平野治

《視察内容》

九州大学の新キャンパスが糸島市に移転が進む中、平成22年糸島市と九州大学との間で、共同で地域開発に取り組む協定書が結ばれた。

これを受け、農商工連携研修をおこない柑橘「はるか」を原材料にしたスイーツを開発して農産物直売所での販売、海外での販売機会も得た。

研究受講生の成果を基礎に地産地消の広がりを実現すべく、農水産物を使った本格的な6次産業化の取り組みを開始した。

6次産業化を推し進めるには①人材育成②中小企業組合の創設③商品開発体制の強化④販路開拓と輸出の取り組み⑤消費者とのふれあい が必要である。

特に、6次産業化は加工食品の製造・販売が叫ばれるが、農林漁業者が持つ経営資源を直接消費者に届けるという視点の、観光サービス、例えば農業（漁業）体験を通して都市農村間交流を行うのも消費者ニーズをキャッチアップできる機会となる。



○課題

売り上げ日本一を誇るJA糸島「伊都菜彩」には販路が無い。「はるか」の商品については指定管理者「ふくふくの里」が製造販売を行い、他にも「糸島のめぐみ事業協同組合」など、商品によって統一がされていないのが現状である。

販路開拓へシフトする方針だが、販路拡大には生産量の安定供給が必要であり、そのためには第1次加工所等の整備も欠かせない。

今年度からは、売れ筋商品のセレクトと共に、糸島市内福岡県内に特化し販路開拓を推進する。

《所感》

農業農村6次産業化についての難しさを担当課より本音でお話頂いた。しかし、大学との連携や糸島市の豊富な農産海産物からは、これからの展開が楽しみにも思えた。

もう1つ注目したのが「糸島市農力を育む基本条例」「糸島市農力を育む基本計画」がしっかり出来ていて、農業研修を受け入れる町づくり事業では、毎年15人程度の受け入れを行っていて、研修生には3万円。研修先には2万円の補助金を出したり、新規就農者支援事業では、農機具などリース料の半分の補助を行うなど、糸島市の農業に対しての働きかけも参考になった。

【第3日】

大分県豊後高田市

人口：23,906人、面積：206,65km²

《視察項目》

豊後高田昭和の町づくりについて

＜担当説明者＞

豊後高田市議会事務局 主幹兼庶務係長 次郎丸浩一
豊後高田市議会事務局 主任 西田巨樹



《視察内容》

古くから国東半島の玄関口として300店舗を数える商店街が賑わっていたが、鉄道の廃止、車社会の進展、人口減少により中心市街地は衰退し、町もシャッター通りとなった。平成4年「商業まちづくり委員会」が立ち上がり、数年かけて歴史や街並みの調査を行い、商店街が最も華やかで元気だった「昭和」をまちの個性としてアピールできれば面白いまちづくりができるということにたどり着いた。そして、平成13年9月から昭和30年代をテーマに、

- ① 昭和の建築再生（昭和の街並み景観づくり）
- ② 昭和の歴史再生（店に残るお宝を一店一宝として展示）
- ③ 昭和の商品再生（店自慢の昭和商品を一店一品として販売）
- ④ 昭和の商人再生（お客さんとのふれあい、おもてなしの心づくり）

に取り組み、そのほか町の拠点施設となる「昭和ロマン蔵」の整備、ボンネットバスの導入、観光客を案内するガイドの配置、町全体をマネジメントする豊後高田市観光まちづくり株式会社の設立を行うなどして、平成15年には観光入込客数が20万人を超え、現在も年間35万人前後の観光客で賑わっている。

《所感》

まずびっくりしたのは、視察件数が多い為、説明は議会事務局が担当されている事だ。



実際に「ご案内人制度」市内のボランティアの案内人さんに昭和の町を1時間をかけて散策しながら商店街や各商店の歴史などを語って頂いた。

店では代々伝わる道具等の珍しいお宝を一店一宝として展示。お客様とのふれあい、おもてなしの心を届ける。など随所に「昭和の店づくり」を感じると同時に商店主の心意気を見せて貰った。

特に、小野市の商店街と同じように1階に店舗、2階に住居となっており、現在も住んでおられる。真似でなくとも小野商店街の活性化を一部住民だけでなく、市民全体が考えていけば良いアイデアも生まれると考える。

平成27年 7月 23日

小野市議会議長 前田 光教 様

民生地域常任委員会
藤原 章

行政視察報告書

先般、実施しました 民生地域常任委員会 行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成27年7月8日（水）～平成27年7月10日（金）

2 視察メンバー

高坂純子 藤原章 富田和也 久後淳司 小林千津子
山本悟朗 山中修己 川名善三
事務局・富田課長

3 視察先及び調査内容

- (1) 山口県下関市
ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について
- (2) 福岡県糸島市
農業農村6次産業化支援事業について
- (3) 大分県豊後高田市
豊後高田昭和の町づくりについて

4 調査結果

【第1日】

山口県下関市

人口 約27万6千人 面積 716.17Km² (行政視察文書)

《視察項目》

有害鳥獣の捕獲対策と、捕獲したイノシシとシカの肉を有効活用するジビエ有効活用について学ぶ

《視察内容》

下関市は平成17年に1市4町が合併して、新「下関」市となっているが、中国山地の末端に連なるためか、シカ、イノシシ、サルの被害は平成19年度で約9千万円、平成26年度は1億4400万円になっている。捕獲頭数は平成26年度はシカ1,360頭、イノシシ1,047頭、サル276頭になっている。基本的には「柵で防護しながらも、積極的な捕獲が必要」という立場で対処しておられる。

また捕獲した野生獣肉の活用と農村地域の活性化を図るため、獣肉処理の「ジビエセンター」を設立されている。

1) 防護対策について

防護柵は国庫補助によるものと、市単独事業としては2戸以下を対象にして、資材費の3/4を補助する制度があるとの事。

2) 捕獲対策について

銃による捕獲が中心との事。狩猟免許者456人（内、銃免許所持者207人）で、市が組織している「鳥獣被害対策実施隊」の人数は288人。狩猟免許の取得には県が、銃は67,000円、わなは15,000円を補助している。また市として「捕獲奨励金」を出している。

3) 「ジビエセンター」について

平成21年度より「ジビエ有効活用」を企画し、ウイルス感染調査や加工品アンケート調査、販路調査、加工品開発などに取り組み、「下関型ジビエ有効活用モデル」を策定して、平成25年3月、「みのりの丘ジビエセンター」が完成。総事業費5,615万円で約半分が国庫補助。

《所 感》

鳥獣被害は本市とは比較にならないくらい多く、また捕獲頭数も本市とはケタが2つ違う。今まで相当苦勞し、努力されたのだろうと推察した。「鳥獣被害対策実施隊」の組織化や小規模防護柵に対する市の単独補助など学ぶ点だと思う。今後の課題として狩猟免許所持者の増加策としてシンポジウムを開催することや、ワナなどの捕獲方法も広げたいと言っておられた。これも参考にしたい。「ジビエセンター」については、小野市周辺の状況では将来の課題として学んでおきたいが、1市だけでなく、広域な協力が必要だろう。

【第2日】

福岡県糸島市

人口 約9万9千人 面積 216.15 Km²

≪視察項目≫

農業・畜産業の6次産業化支援について学ぶ

≪視察内容≫

糸島市は平成22年1月に1市2町（前原市、二丈町、志摩町）が合併して誕生しているが、海と山を擁する自然豊かな市で、古代に「伊都国」が栄えた町です。豊かな海からの海産物も多く、福岡市に隣接することから都市近郊型の農業や畜産業が発展しているようです。農家数を見ると平成22年度の総農家数2,425戸で専業農家数が545戸です。専業農家がかかり多く、農業に熱心な地域だと思います。

糸島市の「6次産業化」の取り組みは市の長期総合計画の基本目標である「地域資源を生かした産業創出のまちづくり」を基本理念として、「新商品の開発」と「生産者の経営感覚の増進」を2本の柱としているとの事です。「新商品の開発」では平成22年に九州大学と連携した研修会がきっかけで、地元糸島市二丈で誕生した柑橘「はるか」（日向夏と甘夏柑の自然交配）を材料とした6次産業化に乗り出し、クッキー、ジュレ、コンフィチュール、アイスキャンディーなどの商品開発を行ってきている。この動きは農産物の「甘夏ドレッシング」や糸島豚を使った「豚みそ」、海産物の「漁師めしの素」「さざえ飯の素」「鯛のアクアパッツア」などに広がっている。

「生産者の経営感覚の増進」では「未来を切り拓く人材育成事業」として平成24年度から農業者、漁業者、食品加工業者などを対象にした研修会を開催している。座学に加えて自分が生産した品物をデパートや海外で実際に販売する実地研修も行っている。

≪所感≫

糸島市は平成22年に「糸島市農力を育む基本条例」、23年に「基本計画」を策定されているが、地域は自然に恵まれて農業、漁業など原材料が豊富であり、6次産業化は大いに可能性があると思った。しかし、実際には糸島市が「課題」として「この間に12商品を開発したが、開発商品が売れないことには生産者の所得向上には繋がらない」「今後は販路開拓にシフトする」としておられるように、生産と販売のバランスを取って軌道に乗せるのはなかなか難しいのも事実だろうと思う。糸島市周辺は古代の歴史や海・山など観光資源も豊かで、うまくタイアップできれば双方に相乗効果が生まれるのではないかと思った。

地域の農産品や農産加工品で売れる商品を作るのは本当に難しいと思うが、誰かが柱になり、熱意ある人たちを行政がコーディネートすることが必要だろうと思う。

【第3日】

大分県豊後高田市

人口 約2万3千人 面積 206.65 Km²

≪視察項目≫

昭和を復活した町づくりによる活性化策を学ぶ

≪視察内容≫

豊後高田市は平成17年3月に1市2町（豊後高田市、真玉町、香々地町）が合併して新「豊後高田市」になった。隣接する宇佐市には全国八幡宮の総本宮である宇佐神宮があり、国東半島の西の入り口として栄えてきたが、昭和30年をピークに過疎化が進み、昭和40年の宇佐参宮鉄道の廃線などで8商店街・300店舗を数えた中心市街地も衰退してきた。衰退する中心市街地の起死回生をかけて、商工会議所は平成4年に大手広告代理店に依頼して再生プランを策定したが失敗した。しかし失敗を契機に、商工会議所を中心に作られていた「豊後高田市商業まちづくり委員会」は数年かけて市街地の歴史調査を行い、「昭和30年代の町」を個性としてまちづくりを行うことになった。

キーワードは4つで①昭和の街並み景観づくり、②昭和の歴史再生、③昭和の商品再生、④昭和の商人再生。テーマに沿って景観づくりや店舗改装をすすめ、平成13年9月に「昭和の商店街」がオープンする。翌年14年には資産家・野村家の大きな農業倉庫3棟を改修して観光拠点施設「昭和ロマン蔵」ができた。この中には「駄菓子屋の夢博物館」「昭和の絵本美術館」「ラストラン」「昭和の夢町三町目館」などが入っている。またボンネットバスや古い車も置かれている。

昭和の町の年間観光客数は、平成13年度・2万5千人、平成14年度・8万人から平成15年度・20万人になり、平成26年度は34万人になっている。年間5万人程度と予想していた観光客が、平成15年から一気に増えたので、様々な課題が生じ、平成17年に第三セクター「豊後高田市観光まちづくり（株）」を設立して運営している。

≪所 感≫

「百聞は一見に如かず」というが、予想以上に大きな（長い）商店街で、レトロな雰囲気溢れ、私などは郷愁を感じてしまう。全部回ると1時間以上かかると思う。商店街に隣接して「昭和ロマン蔵」があり、駐車や観光案内の拠点になっている。行政は観光拠点施設「昭和ロマン蔵」と周辺の整備や「昭和の町展示館」にかなりの資金をつぎ込んでいる（2億円ぐらい）が、加えて上記の4つのキーワードを実現するために、建物の復元や、代々伝わる道具等を展示するための整備費に補助を出している。行政と地域の高い意気込みが伝わってくる。見学はボランティアで案内してくれる人がいて、建物や道具、名物などの説明が聞けて大変良かった。説明がなかったら解らないものも多いと思った。また商店の人たちが明るく元気なのも印象に残ったし、再度訪れてみたい思いも残った。小野市も立派な商店街があるので、テーマを決めて活性化を図るのも一案かもしれない。参考にしたい。

平成27年7月21日

小野市議会議長 前田光教様

民生地域常任委員会
富田和也

行政視察報告書

先般、実施しました民生地域常任委員会行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成27年7月8日（水）～平成27年7月10日（金）

2 視察メンバー

◎高坂純子・○藤原 章・久後淳司・小林千津子・山本悟朗・山中修己・川名善三・富田和也
随員：議会事務局 富田守人

3 視察先及び調査内容

(1) 山口県下関市（人口：約273,246人、面積：716.17K㎡）
ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について

(2) 福岡県糸島市（人口：100,102人、面積：216.15K㎡）
農業農村6次産業化支援事業について

(3) 大分県豊後高田市（人口：約23,444人、面積：206.65K㎡）
豊後高田昭和の町づくりについて

4 調査結果

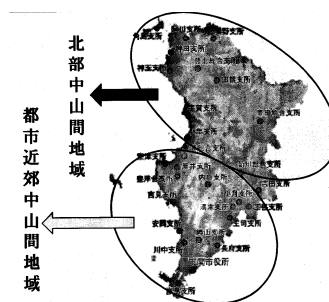
【第1日】

山口県下関市

人口：約273,246人 面積：716.17K㎡

《視察項目》

ジビエ有効活用推進事業及び
有害鳥獣対策について研究・視察する

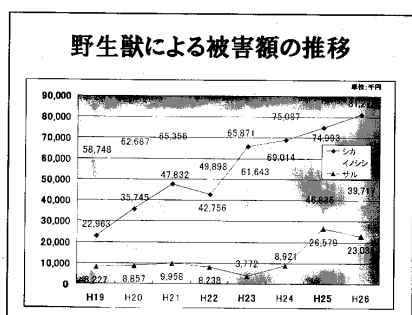


《下関市の概要》

下関市は、平成17年2月13日「自然と歴史と人が織りなす交流都市」をまちづくりの基本理念として、旧下関市と旧豊浦郡の4町（菊川町、豊田町、豊浦町、豊北町）の新設合併により新たに誕生した。人口約28万人県下最大の都市である。

《視察内容》

ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について



野生獣による被害額の推移

合併により中山間地を抱えることになり、野生獣の捕獲量が増大した。合併後も毎年増加し、平成24年度のシカ・イノシシ・サルの捕獲実績2945頭をピークにH26年度は2455頭、この捕獲数は全国的に見ても高水準で推移している。

*近年はシカが繁殖増加中とのことである。

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	合計
シカ	6708	9318	9958	1,0568	1,2108	1,4678	1,3018	1,2608	9,1908
イノシシ	6958	7698	8268	1,4988	1,4918	1,4318	1,2028	1,5478	8,9478
サル	178	428	138	358	298	478	458	458	2788
計	1,5728	1,7428	1,8548	2,5978	2,7308	2,9458	2,5408	2,4588	18,4138

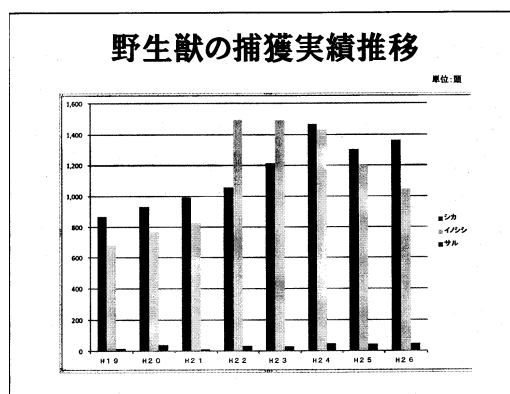
北部中山間地の農村地域の人口が減少し、野生獣による農作物被害が深刻化してきたことから、ジビエセンター建設を決めジビエ有効活用と有害獣の被害を軽減させることを考えた。

↓【小野市と比較：年/捕獲頭数】

小野市	H24年度	H25年度	H26年度
イノシシ	4頭	10頭	8頭
シカ	0頭	0頭	1頭

①第1ステージ 平成21年度からの取り組み

- * E型肝炎ウイルス感染調査（山口大学農学部）
- * 意見交換会
- * 先進地視察
- * 基本計画策定
- * 建設予定地地元説明会の開催、同意取得
- * イノシシ等の処理衛生管理ガイドライン策定
- * ジビエPR・加工品アンケート調査及び販路調査



- *施設実施設計→施設建設
- *指定管理者選定→共用開始

E型肝炎ウイルス感染調査結果

研究方法：市内で捕獲した検体の血液、肝臓を委託先に送致し、E型感染ウイルス（HEV）抗体を検出

結果：イノシシについてはHEV抗体を保有、シカについてはイノシシに比べ感染率が低い

今後の指導方針：イノシシ・シカ肉は必ず加熱処理

下関市イノシシ等の処理衛生管理ガイドラインを策定

- イノシシ・シカの野生獣については、規定がない。
- 捕獲から解体に至る衛生的処理の基準がない。
*下関市保健所の協力により作成

②第2ステージ 下関市の取り組み

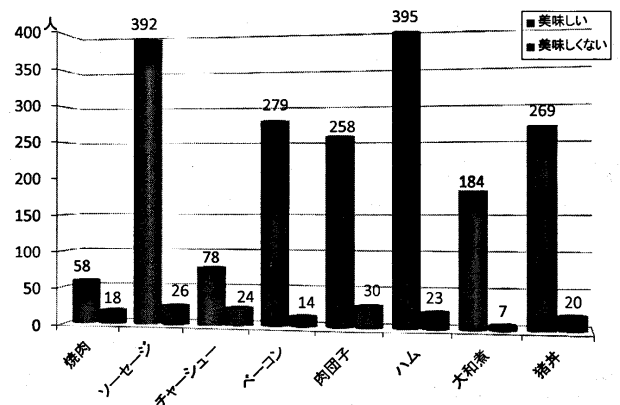
- 販路確保のため市内飲食店・食肉販売店にアンケート調査を実施
(配布：平成23年1月20日、回答期限：平成23年2月4日)
その結果、市内230店舗のうち約1/4店が関心有りと回答
- 販路確保のための【ジビエ料理試食会】を平成21年度から4年間で8回開催

>販路の確保【ジビエ料理試食会】

- 平成21年5月10日(日)第19回森林まつり ※200名
【イノシシ】焼肉・ソーセージ 【シカ】竜田揚げ・ハム
- 平成21年11月1日(日)秋のルーラル・里山フェア ※200名
【イノシシ】チャーシュー・ソーセージ 【シカ】竜田揚げ・ハム
- 平成22年5月9日(日)第20回森林まつり ※180名
【イノシシ】ベーコン・肉団子 【シカ】チャーシュー・ソーセージ
- 平成22年10月31日(日)秋のルーラル・里山フェア ※230名
【イノシシ】ハム・大和煮 【シカ】唐揚げ・ハンバーグ
- 平成23年5月8日(日)第21回森林まつり ※200名
【イノシシ】イノシシ丼 【シカ】シカカレー
- 平成23年10月30日(日)秋のルーラル・里山フェア ※200名
【イノシシ】ベーコン・肉団子 【シカ】チャーシュー・ソーセージ
- 平成24年2月19日(日)軽トラ市 ※300名
【イノシシ】ソーセージ・ハム 【シカ】ソーセージ・ハンバーグ
- 平成24年10月28日(土)秋のルーラル・里山フェア ※200名
【イノシシ】イノシシ丼 【シカ】シカカレー

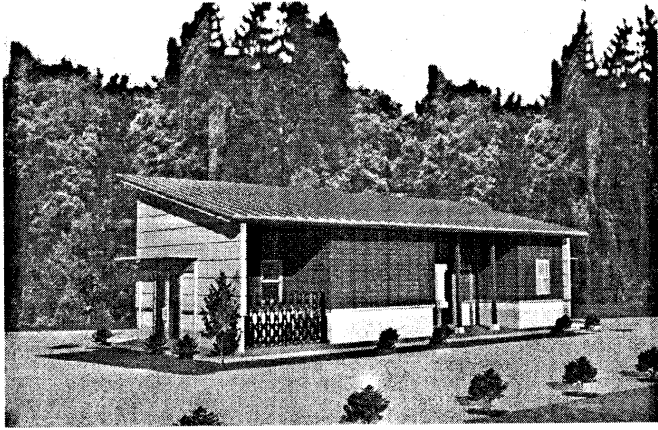
イノシシ
シカ
7種類
8種類

>試食の結果【イノシシ】



③第3ステージ 《みのりの丘ジビエセンター》平成25年4月開業

みのりの丘ジビエセンターについて



農林整備課 有害鳥獣対策室

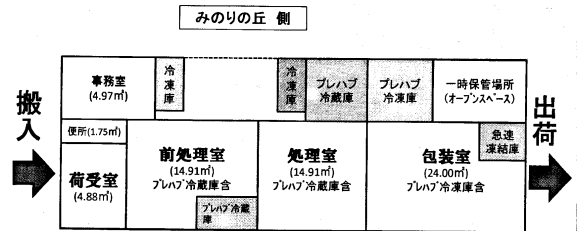
指定管理者は公募し、指定管理料は人件費、光熱水費などの年間543万円で契約、施設の管理、運営を行い自主企画事業として、買取り、解体請負、精肉加工、販売があり、イノシシ・シカを猟友会からいくらかで買っているのか市は不明とのことである

【みのりの丘ジビエセンターの概要】

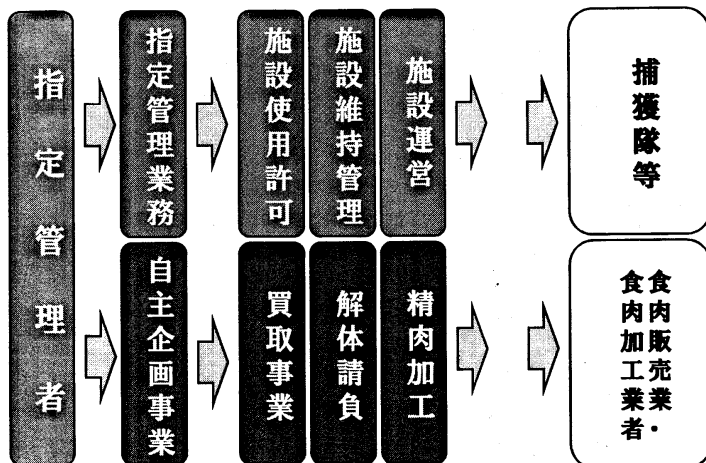
- 総事業費：56,229千円
- うち国費：27,148千円
- 市費：28,919千円
- 建築工事：48,288千円
- 建築主体工事：16,141千円
- 給排水衛生設備工事：27,737千円
- 電気工事：4,410千円
- 造成工事：2,730千円
- 備品購入費：5,130千円

➤施設配置図

【延べ床面積:65.42㎡(約19.8坪)】



➤指定管理者が行う業務



年間計画処理頭数

イノシシ→310頭/年
シカ→290頭/年
北部中山間地域における

年間計画処理頭数

年間600頭

供用開始から現在までの状況

平成25及び26年度搬入個体数

- ・平成25年度 595頭(イノシシ134頭 シカ461頭)
- ・平成26年度 546頭(イノシシ114頭 シカ432頭)

商品化及び販売

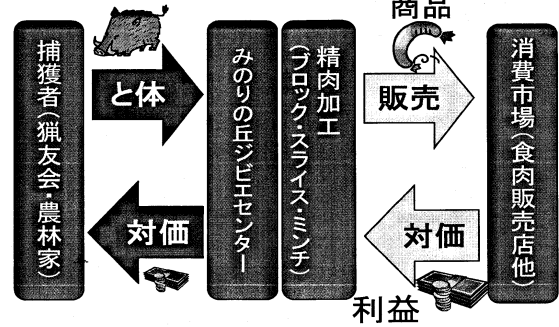
・イノシシ・シカ肉加工品全12品

シカロースブロック、イノシシスライス肉(ロース)
 イノシシスライス肉(ロースとモモ)、シカスライス肉(ロースとモモ)
 イノシシ・シカミンチ、イノシシメンチカツ、シカミルフィーユカツ
 イノシシ・シカウインナー、イノシシ・シカフランクフルト

- ・平成25年5月24日より販売開始

みのりの丘売店、道の駅西の市、道の駅豊北など

>施設における受け入れ方法



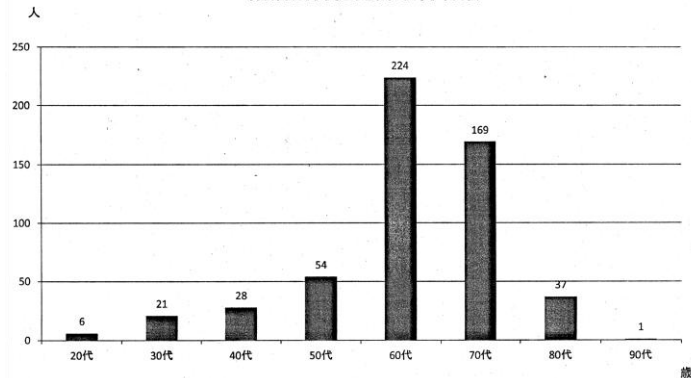
更なる取り組みとして

北部中山間地域にも新たな拠点(ジビエセンター)を作る予定とのことで下関市は第2段階に入る。

*今後の課題と取り組み

①狩猟免許所得者の高齢化が課題であり捕獲隊員、銃器による捕獲隊員、わなによる捕獲隊員若返りを図るための若年者へのシンポジウムを開催しているが、若年者の銃への意識も変わりつつあるため、「わな」による捕獲隊員を増やす努力をしている。

階層別狩猟免許取得者数



②販路拡大の取り組みとして、市民にレシピ試食会をしているが、ジビエ肉は牛肉と比較して販売価格が高いため販路難になっている。

*市民からは、もう少し「安ければ」という声が多いとのことである

《所感》

有害鳥獣対策について、同じ鳥獣でも地域によって被害の様相が異なり、地域や集落ごとの対策が必要であると感じる。言うまでもなく被害が拡大している原因としては山林の荒廃と耕作放棄地の増加があげられるが、今後は農業経営を行う上で鳥獣被害の影響を無視することが出来ない状況にある。補助金があるときだけ対策が実施されるケースも多いというが、補助金がなくなっても、地域ぐるみで対策を続けられる体制づくりや野生生物と人間のよりよい共存関係を模索することが今後一層、必要となるであろう。下関市の取り組みの、その成果はまず販路の準備→市民の立場にたちレシピ試食会を開催し→販路先の構築→地域住民による埋設処分の負担を軽減するため買取るという捕獲意欲の向上→ジビエセンター開業に漕ぎ着ける、という商法の原点に立った発想である。小野市の鳥獣被害額、捕獲頭数とは大きく異なるものの、今後の6次産業化を推進する上で大きなヒントとなった。

以上

【第2日】

福岡県糸島市

人口 100,102人 面積216.15Km² (県内6位)

≪視察項目≫

農業農村6次産業化支援事業について

≪糸島市の概要≫

平成22年1月1日に、前原市と二丈町、志摩町が合併し、「糸島市」が誕生した。昭和58年JR筑肥線電化と福岡市営地下鉄との相互乗り入れの実現等が伴って人口増加となり、都市化も進展しています。平成17年度には、九州大学が糸島地域へ移転し、伊都キャンパスの開校を契機として連携を深め、九州大学の知的資源と本市の地域資源を融合した学術研究都市の実現に向けて取り組んでいる。福岡市の西に隣接していることから、ベッドタウンとしての性格を持つ地域である。それゆえに、都市近郊型の農業や畜産業が盛んで、日本一の売り上げを誇るファーマーズマーケットJA糸島（伊都菜彩）があるまちである。

≪視察内容≫

糸島市における6次産業化の取り組みについて研究・視察する

糸島市では農林水産業者の所得向上と地域活性化を目指し、「新商品の開発」と「生産者の経営感覚の増進」の2本の柱で6次産業化事業を推進している。

①糸島市の農業従事者と農家の状況

【農業形態】

個人経営 1736経営体
集落営農 0経営体
農事組合法人 8経営体
株式会社 25経営体
その他 16経営体

【耕作面積】

5ha未満 1,662経営体
5～10ha 73経営体
10～20ha 34経営体
20ha以上 16経営体

糸島の農家の状況

◆農家数等の推移

資料：農林業センサス

	H7	H12	H17	H22
総農家数	3,137戸	2,870戸	2,656戸	2,425戸
専業農家数	629戸	551戸	545戸	545戸

◆農家の高齢化率（H22）

	全国	福岡県	糸島市
	61.6%	58.2%	50.5%

◆糸島市における新規就農者数

H22	H23	H24	H25	H26
13(7)	19(9)	18(7)	14(5)	19(4)

※()は農外からの参入者

●農業研修受け入れ、事業相談などサポート事業を展開

(例、新規研修生、3万円×3ヶ月間、市から補助また生産者側には2万円×3ヶ月間、市から補助)

* 「糸島市農力を育む基本条例」平成22年1月制定

* 「糸島市農力を育む基本計画」平成23年3月策定

①条例制定までの経緯

平成11年の国の「食料・農業・農村基本法」の制定を受け、当時の「農」に関する問題として、「農業経営をめぐる厳しい情勢による担い手確保と荒廃農地の発生防止」「地産地消・食育の推進」「自然環境の保全と多目的な機能を発揮するための、農業持続的な発展への期待」があったが、これら諸問題を総合的に解決していくため、条例として制定し市民意識の向上を図るとともに、市としても農業施策を強力に推進していく決意表明となった。

②条例制定のねらい

大きなポイントは「市民参画」であるので、食料、農村農業に対する住民の理解を深め「糸島産」の安全で安心な農作物の生産、流通消費を図ることによって、農業・農村が持続的に発展し、また市民にとっても豊かで住みよい地域社会の実現を目指すことをねらいとしている。

③新商品の開発とその目的

糸島市内で生産される産品を加工することにより、産品の付加価値化を図り、生産者の所得向上と農山漁村の活性化を図ることを目的としている。

柑橘“はるか”誕生の秘話・・・自然交配で奇跡的に生まれた奇跡のみかん

昭和55年（1980年）頃、自宅の庭に日向夏の種子を捨てたあとから実生が生えてきたのを発見。（日向夏と甘夏柑の自然交配）穂木をとって温州みかんに高接ぎし結実。平成8年10月“はるか”として品種登録された。

“はるか”の生産状況

糸島市内の生産者・・・21戸

生産量 約60t（推計）

全国の収穫量・・・約1,599t

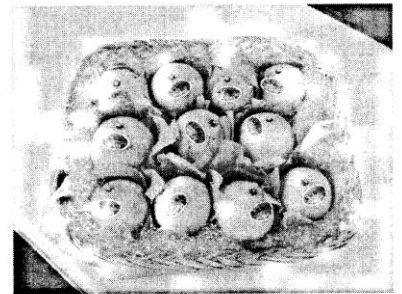
広島県の収穫量・・・約612t

愛媛県の収穫量・・・約584t

長崎県の収穫量・・・約276t



はるかの生育状況



はるか青果

- 平成22年9月～11月：九州大学との連携事業として農商工等人材育成事業研修会を開催

（九州大学の先生による講演会）

テーマ：糸島の農水産物の紹介、地域ブランドの活用、新商品開発の発想力
ビジネスプラン作りの知識習得 参加者：県内外より48名

- 平成22年12月：九州大学及び九州カネカ食品販売（株）等の協力により
「はるか」を使ったお菓子の試作開始
- 平成23年6月：新商品開発・販路開拓支援事業（9,998千円）予算措置（糸島市）
- 平成23年7月：新技術・地域資源開発補助事業に採択
補正額：3,000千円（(財)地域総合整備公団）
- 平成23年7月16日（土）：販売スタート
開発した商品・・・はるかのまるごとジュレ735円
はるかのクリームサンド126円 はるかのコンフィチュール735円
甘夏ドレッシング500～550円
他→ 甘夏ようかん、鯛のアクアパッツア、鯛みそ、はるかアイスクャンディー
農産直売所“福ふくの里”を中心に販売を開始

基礎研修（座学）と実地研修（海外・国内）の組み合わせで実施

①基礎研修

日時	テーマ	講師
8月25日	近年の農業情勢—TPP—震災—農産物輸出の可能性	掘田 和彦（東京農業大学）
	食料の流通機能とマーケティング	福田 晋（九州大学）
	TPPをチャンスにする方法を考える	Group 討議
9月22日	貿易の仕組みと日本食品への海外の期待	岡部 健太郎（貿易コンサルタント）
	食品輸出の法規制、為替リスク、食習慣と宗教の制約	//
	糸島産食材の輸出モデルを考える	Group 討議
10月27日	生鮮流通技術の現状と鮮度維持	内野 敏剛（九州大学）
	消費者意識と地域ブランド戦略	工藤健一（㈱九州屋）辻田朋子（弁理士）
	糸島の地域ブランドを考える	Group 討議
11月17日	農業の6次産業化と成功事例	掘田 和彦（東京農業大学）
	漁業の6次産業化の進め方	副島久実（水産大学校）
	糸島の6次産業化の進め方を考える	Group 討議
12月22日	情報の伝え方、伝わり方、昔と今	新谷敏之（IT戦略コンサルタント）
	情報を伝えるツール	//
	ネットショップ構築のIT活用法を考える	Group 討議

《農業における今後の課題》

担い手不足、農業従事者の高齢化、耕作放棄地の増加、取引価格の低迷、糸島ブランドの確立と更なる販路の拡大が求められている。

〈所 感〉

糸島市農力を育む基本条例・基本計画は、農業振興に関する基本条例の制定についてあまり例がなく、素晴らしい取り組みである。この条例について、農業者だけでなく、市民が消費者としての意識で積極的に地産地消について関わっていく点について、この条例に意義があると感じた。そして糸島市の学校給食で地産地消の取り組みが進んでいることは、これらの条例に取り組んだ効果であると推察する。

【第3日】

大分県豊後高田市

人口 23,444人 面積206.65Km²

〈視察項目〉

豊後高田昭和の町づくりについて

〈豊後高田市の概要〉

豊後高田市は大分県の北東部、国東半島の西側に位置し、平成17年3月に合併する前の旧豊後高田市は人口1万8千人足らず、全国で9番目に人口の少ない市であった。平成17年3月31日に1市2町が合併、新生「豊後高田市」が誕生した。

〈視察内容〉

商店街の活性化、中心市街地対策や地域おこしについて研究・視察する

「昭和の町」による地域おこし

中心市街地、市内商店街は昭和30年代は「おまち」と呼ばれ、その賑わいはピークを迎え、必然的に人々が集う賑やかな場所で、県北地域の商業の中心地として栄えたが、昭和40年の宇佐参宮鉄道の廃止・人口の減少・モータリゼーションの進展・平成に入ると郊外型大型店の進出による人波の変化によって急速に衰退し、全盛期には8商店街で300店舗を数えていた町もシャッター通りとなりついには“商店街を歩くのは人よりも犬や猫の方が多し”などと揶揄される様相となる。

(1) 「昭和の町」のまちづくりの背景・経緯

ステップ①：平成5年3月「豊後高田市商業活性化構想」の策定

ステップ②：まちの個性探し、テーマ探し（歴史調査の結果、大正・昭和初期の建物が残っていた。その結果、テーマ「昭和」に定まる。平成8年「豊後高田市市街地ストリート・ストーリー」を完成）

ステップ③：1年間かけた「まちなみ実態調査」

(2) 「昭和の町」の取り組みについて

- ①昭和の建築再生（昭和の町並み景観づくり）
- ②昭和の歴史再生（店に残るお宝を一店一宝として展示し町や店の物語づくり）
- ③昭和の商品再生（店自慢の昭和商品を一品として販売）
- ④昭和の商人再生（お客さんとのふれあい、おもてなしの心づくり）



(3) ご案内人制度（町を楽しく周遊できるようソフト面を充実：1時間ガイド）

(4) 昭和の町の拠点施設となる昭和ロマン蔵（北蔵、東蔵、南蔵）H14年オープン

(5) 新たな拠点施設として「昭和の町展示館」の整備

(6) ボンネットバスの導入 H21年7月

（観光周遊ツールとしての活用を始める）→

(7) 昭和の町での様々なイベントを開催

(8) ステップのための提言

①おまち再生計画 H16年11月

②豊後高田市観光まちづくり株式会社の設立 H17年11月



*これらの活動が認められ、H19年5月「改正まちづくり三法」に基づく新たな「豊後高田市中心市街地活性化基本計画」を策定。県内の市町村で初めて国の認定「総理大臣賞」を受賞。

《昭和の町年間観光入り込み客数の推移》

年	入り込み客数(人)	備考
H13	25,712	
H14	80,528	10月 昭和ロマン蔵オープン
H15	202,334	
H16	249,392	
H17	259,647	2月 昭和ロマン蔵東蔵昭和の絵本美術館オープン
H18	275,260	4月 昭和ロマン蔵南蔵旬菜南蔵オープン
H19	361,320	4月 昭和ロマン蔵北蔵昭和の夢町三丁目館オープン
H20	306,844	
H21	333,488	4月 昭和の町展示館本格稼働
H22	329,968	
H23	401,036	
H24	380,143	
H25	370,951	
H26	341,890	

《今後の課題》

平成23年をピークに観光客が低迷しているので、今後「目指すべき中心市街地の姿」を定める3つの目標（飛躍、進化、創造）を掲げ事業を推進し、10年後を見据え広域連携と、観光、定住者と一緒に歩く町、「いやし観光」PRで60万人～更には200万人を目指すとのことであった

《所 感》

商店街の再活性化は全国の地方自治体においても必要不可欠な大きな課題である。豊後高田市の取り組みの成果は、的確な分析に基づき、“資金をかけずにあるものを活かすこと”で「昭和の町」をスタートさせ中心市街地の活性化に成功した。長期的なビジョンで集中投資、定期的な改善や発信、PRをすることで更なるアイデアを創出していることが、「市民・商工会議所、行政」との信頼関係がしっかりと構築されている。

平成27年7月17日

小野市議会議長

様

民生地域常任委員会

久後淳司

行政視察報告書

先般、実施しました 民生地域常任委員会 行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成27年7月8日（水）～27年7月10日（金）

2 視察メンバー

高坂純子（委員長）・藤原 章（副委員長）・富田和也・小林千津子・山本悟朗
・山中修己・川名善三・久後淳司

3 視察先及び調査内容

(1) 山口県下関市（人口：約27万6千人、面積：716.17Km²）
ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について

(2) 福岡県糸島市（人口：約9万9千人、面積：216.15Km²）
農業農村6次産業化支援事業について

(3) 大分県豊後高田市（人口：約2万3千人、面積：206.65Km²）
豊後高田昭和の町づくりについて

4 調査結果

【第1日】

山口県下関市

人口：約27万6千人、面積：716.17Km²

《視察項目》

ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について



《視察内容》

＜テーマ＞

野生獣に対する対策とジビエ活用について学ぶ

＜経緯＞

- ・下関市において野生獣の被害は年々増加している（H26年度被害額約8,127万円）。
- ・主にシカ・サル・イノシシによる被害
- ・従来の捕獲のみだけでなくジビエとして利用できないか検討

＜取組＞

- ・平成21年～23年にかけてはイノシシとシカのE型ウイルス感染調査を行う。イノシシについてはHEV抗体を保有していると判明。よって加熱処理が必要。
- ・栄養素としては鉄分やビタミンB2が牛や豚肉よりもかなり多い
- ・ジビエの有効活用モデルとして捕獲処理・加工販売・被害軽減の基本計画を策定
- ・市の保健所の協力により衛生管理のガイドライン作成
- ・販路確保に向け市内飲食店にジビエについてのアンケート調査実施
- ・8回に上る試食会の開催
- ・総事業費5,614万円をかけ、みのりの丘ジビエセンターを平成25年に設立

＜効果＞

- ・イノシシ年間310頭、シカ年間290頭の600頭処理を行う
- ・ジビエセンターでは猟師さんが持込そのまま処理まで行う
- ・運営は公募で行い指定管理者として施設管理をしてもらう

＜課題＞

- ・ほぼ横ばいの運営状態なので黒字化を目標としている

- ・ 販路を拡大していきたい
- ・ 捕獲隊員が高齢化してきている
- ・ 捕獲しても増加しているシカ・サルへの効果的な捕獲方法の確立が必要

《所 感》

農作物を育てるには切っても切れない問題ではありますが、下関市の特徴としましては有害な鳥獣対策として施設を建設し、ジビエへの活用に転じるなど小野市にもあるイノシシ被害を単に捕獲するだけでなく、食用として積極的に活用させていこうと努力されていると感じました。単なる食用の肉として販売するだけではなく、視覚的にも気を配った形としてメンチカツ・ウインナー・フランクフルト・ミルフィーユカツといった加工をし、地元の特産品として販路開拓されている手法は非常に素晴らしいと感じました。また鳥獣被害対策実施隊を設置し日々活動されており、猟友会の後継者としての問題も小野市の実情と似通った部分もありますが、実施隊も積極的に活動されているように感じました。元々の被害頭数にはかなりの差がありますが、小野市でも猟友会と各自自治体が連携して、継続的に予防して行く事が重要だと思います。

【第2日】

福岡県糸島市

人口：約9万9千人、面積：216.15Km²

《視察項目》

農業農村6次産業化支援事業について



《視察内容》

＜テーマ＞

地元農水産業への支援と施策について学ぶ

＜経緯＞

- ・農業における担い手不足が深刻化している
- ・農業従事者等の高齢化が進んでいる
- ・耕作放棄地が増加している
- ・農産物の取引価格の下落が顕著
- ・糸島ブランドの確立をしていく必要がある

＜取組＞

- ・農林水産業者の所得向上と地域産業の活性化を目指す計画を策定
- ・「新商品の開発」と「生産者の経営感覚の増進」の2本柱を立てる
- ・平成22年に九州大学との連携事業
- ・農商工連等との連携した人材育成事業
- ・主要農産物の詳細な調査
- ・日帰りレジャー客（530万人）へのアプローチ
- ・糸島発祥の柑橘「はるか」を使用したお菓子の開発
- ・日本一の売り上げ（年間37億円）を誇るファーマーズマーケットJA糸島「伊都菜彩」の利用
- ・甘夏や鯛を加工した新たな新商品展開

＜効果＞

- ・九州大学と連携協定を結び農業を含むあらゆる分野で連携事業が一層盛んになった
- ・「糸島市農商工連携推進協議会」を立ち上げ新商品開発や販路拡大についてアドバイスを受け事業を進めている
- ・糸島ブランドとして多数商品を開発していけるようになった

＜課題＞

- ・国内ではあらゆる加工食品がデパートやスーパーで競っているので販売が難しい
- ・糸島産の価値を高めるには単に低価格競争に参加するのではなく、新しい発想の高付加価値商品で勝負する必要がある。
- ・販売は福岡都市圏だけでなく、首都圏や海外も視野に入れた戦略作りが必要
- ・糸島ブランドを確立することで、地元の農林水産業の所得も向上させる事ができる

《所 感》

いち早く農業の6次産業化に目を向け事業を展開されている進め方は率直にうらやましいなあと感じました。若い世代の農水産業に携わる人材育成にも取り組まれ、国内に留まらず海外に目を向け販路を開拓されている姿勢は、とても素晴らしく感じられましたし、うまく活用できれば小野市にとっても魅力ある事業のヒントになるのではないかと思います。糸島市の農業に関わる方々は減少率が低く、それはやはり行政を通じた

働き掛けがあつての事であり、もちろん農家の方々それぞれに自助努力も必要ではありますが、小野市にとっても活かせる部分が多いように感じました。農水産業は高齢化や後継者不足などひっ迫した問題が多いですが、ポジティブに考え「何かできることはないか」と施策を進められている糸島市の6次産業の考え方は非常に刺激的で勉強になりました。

【第3日】

大分県豊後高田市

人口：約2万3千人、面積：206.65Km²

《視察項目》

豊後高田昭和の町づくりについて



《視察内容》

＜テーマ＞

衰退した商店街の復興について学ぶ

＜経緯＞

- ・昭和40年代以降人口が減少しつづけている
- ・中心市街地は衰退し全盛期には8商店街で300店舗あつた町もシャッター通りになってしまった。

＜取組＞

- ・平成4年度「豊後高田市商業活性化構想」策定
- ・豊後高田市商業まちづくり委員会は中心市街地の個性を探し出すため数年かけて歴史調査を行う

- ・その結果「昭和」を「まちの個性」とすれば面白いまちづくりができるのではないかとすることに辿り着いた
- ・平成11年には既存商店街再生研究会議を結成し、商工会議所・市役所のスタッフも出席し議論した
- ・平成12年にまちなみ実態調査を開始
- ・昭和の町商店街の4つのキーワード
 - ① 昭和の建築再生（昭和の街並み景観づくり）店舗の改修費用の3分の2を市などから補助する
 - ② 昭和の歴史再生（店のお宝一点一宝を展示）整備費用の2分の1を補助
 - ③ 昭和の商品再生（昭和の商品を一点一品販売）
 - ④ 昭和の商人再生（お客さんとのふれあい・おもてなしの心づくり）
- ・ご案内人制度（ボランティア）
- ・総事業費12億7千万円の「豊後高田市中心市街地活性化基本計画」を策定し、県内市町村で初めて国の認定を受ける

<効果>

- ・平成13年にスタートし観光客は年間25,712人から平成26年には341,890人まで増加している
- ・一度に予算をかけ拡張できないので徐々に施設を増築していくことで顧客増につながった
- ・「ホーランエンヤ」や「昭和の町レトロカー大集合」、「昭和の町打ち水大作戦」など様々

なイベントを波及させ賑わいを作っている

- ・当初年間5万人を見込んでいたのが、20万人と観光客の増加による人手不足に対応するため、豊後高田市観光まちづくり会社を設立する



<課題>

- ・平成24年の第2期基本計画では、全国初となる内閣総理大臣の認定も受け、持続性のある更なる活性化に向け基本方針に3つの目標を掲げ取り組んでいく
- ① 飛躍～いとおしく懐かしいおまち～
昭和の町の新拠点施設整備、ロマン蔵のリニューアル、更なる商店街の活性化など
- ② 進化～高齢者が楽しいおまち～
玉津プラチナ通りの活性化、楽しく歩ける道路の整備など
- ③ 創造～市民がうれしいおまち～
新図書館、新庁舎の建設、都市公園の整備など中心地の整備

《所 感》

昭和の町として商店街を甦らせたのは、商店街店主や商工会・市役所の方々の一体となった並々ならぬ努力があったのだと感じました。行政の立場から様々なアイデアをだされ、何とかしたいという想いのもと支援策の検討を重ね実行されていると思いました。特に印象に残ったご案内制度のボランティアの方々は、地域の事を真剣に考えていらっしやいましたし、何より商店街が好きという気持ちを前面に出されていました。町を盛り上げたい気持ちがあるのご案内は、聞きながらさわやかな気分になりました。そしてやはり物事を成し得るには、ひとつの方向をまず決定し、それに向かい全員が一丸となって取り組む事が大切だと再認識させられました。小野市の商店街とは立地や環境が違いますが、中長期的なスパンで目標を立て進んでいくことや、それぞれの役割を担う人々の意識の持ちようが大切であると学びましたので、小野市にも何か活かせる部分があるのではないかと感じました。

平成 27 年 7 月 17 日

小野市議会議長 前田光教様

民生地域常任委員会
小林 千津子

行政視察報告書

先般、実施しました 民生地域常任委員会・行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成 27 年 7 月 8 日（水）～平成 27 年 7 月 10 日（金）

2 視察メンバー

高坂純子 藤原 章 富田和也 久後淳司
小林千津子 山本悟朗 山中修巳 川名善三

3 視察先及び調査内容

- (1) 山口県下関市（人口：約 27 万 6 千人、面積：716.17K m²）
ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について
「増え続ける有害鳥獣の被害対策と、捕獲後のジビエ有効利用について」
- (2) 福岡県糸島市（人口：約 9 万 9 千人、面積：216.15 K m²）
農業農村 6 次産業化支援事業について
「地域に生かせる 6 次産業と支援について」
- (3) 大分県豊後高田市（人口：約 2 万 3 千人、面積：206、65 K m²）
豊後高田昭和の町づくりについて
「町づくりの原点とは何か」

4 調査結果

【第 1 日】

山口県下関市

人口：約 27 万 6 千人、面積：716.17K m²

《視察項目》

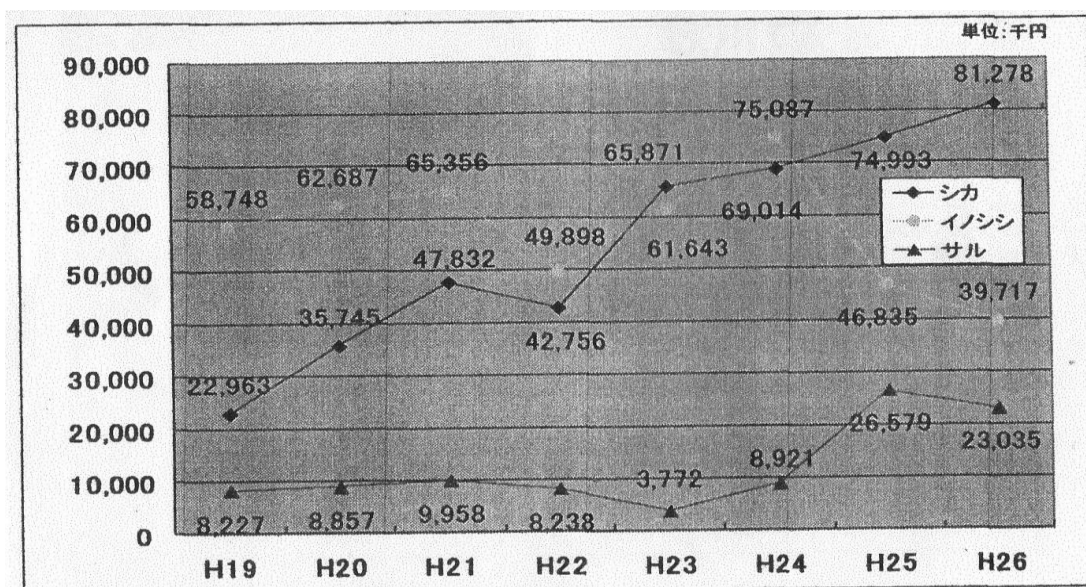
ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について

《視察内容》

下関市は、平成 17 年 2 月に旧下関市と旧豊浦郡 4 町が合併、11 年目を迎えた県下最大の中核市です。合併により源平合戦の壇ノ浦古戦場、巖流島、などの歴史的観光資源、土井ヶ浜海水浴場、下関水族館、などの観光施設、多くの温泉地も有する、海に、山に抱かれた本州最西端の市です。

下関市は山間部が 3 分の 2 を占めますが、野生獣の被害額が増え続け、中山間地域の人口減少、活力の衰退防止のため「みのりの丘ジビエセンター」を建設したとの事でした。

野生獣による被害額の推移



26年度には被害額が1億6千万円

みのりの丘ジビエセンターの設立

目的 ジビエの有効活用
有害獣被害軽減

みのりの丘ジビエセンターについて

○ 基本計画策定

目的 地域における有害獣被害を軽減するための仕組みを構築するため
下関型ジビエ有効活用モデル 捕獲処理機能 加工販売機能
対象獣 イノシシ 日本鹿の2種類

○ 総事業費 56,148 千円 (国費 27,229 千円 市費 28,919 千円)

○ 年間計画処理頭数 600 頭

イノシシ 310 頭 シカ 290 頭

○ 年間指定管理料 5349 千円 常勤 1 名 土日 アルバイト 1 名

○ 搬入から出荷迄の流れ

搬入, 洗淨—外観診断—放血, 冷蔵—肉カッター脱骨—スライス加工
ミンチ加工—冷凍保存—出荷

1 日平均 5 頭から 10 頭 肉レベル 9.3 トン

猟師が持ち込んで自主事業

処理が楽になる—肉も買い取り—捕獲が進む—地域の活性化

野生獣の捕獲実績

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	合計
シカ	870頭	931頭	995頭	1,056頭	1,210頭	1,467頭	1,301頭	1,360頭	9,190頭
イノシシ	685頭	769頭	826頭	1,496頭	1,491頭	1,431頭	1,202頭	1,047頭	8,947頭
サル	17頭	42頭	13頭	35頭	29頭	47頭	45頭	48頭	276頭
計	1,572頭	1,742頭	1,834頭	2,587頭	2,730頭	2,945頭	2,548頭	2,455頭	18,413頭

ジビエの販路の確保

イノシシ 8種類 焼き肉 ソーセージ ベーコン ハム等

シカ 7種類 から揚げ ハンバーグ カレー 等

料理の試食会等おいしいとの評判である

栄養素の比較

牛肉 豚肉と比較すると 糖質が低い

ビタミンB1、B6 が大変多く含まれる

安価である 200g 980円

猟友会について

捕獲隊 288名 年齢 60歳 70歳が多い

隊員の報酬 年額 2000円 出勤時の旅費実費

捕獲奨励金

イノシシ	1頭当たり	5,000円
日本ジカ	〃	10,000円
ノウサギ	〃	200円
カラス	〃	400円
サル	〃	26,000円
タヌキ	〃	1,000円
ヒヨドリ	〃	200円

狩銃免許取得に対して補助金

県より 銃 67,000円 わな 15,000円

今後の課題

増加傾向のシカ サル被害に対して効果的な捕獲方法の確立
ジビエのブランド化と販売

〈所 感〉

小野市とではあまりにも鳥獣の数が違いますが、苦勞されておられる様子でした。みのりの丘ジビエセンターが建てられたので、捕獲後の対処が楽になり捕獲数も増えたとのことでした。有害鳥獣では有りますが生き物を殺傷するという精神的な面もあると思います。ジビエの料理がおいしいとのことでしたが食味を試みたいと思います。

【第2日】

福岡県糸島市

人口：約 9万9千人、面積：216.15 Km²

〈視察項目〉

農業農村6次産業化支援事業について

〈視察内容〉

糸島市の北側は玄海灘に面し、市の出入りの激しい地形は長い海岸線で9か所所有する漁港の水あげ量は福岡県で最大、東側は福岡市に隣接、福岡都心の繁華街まで地下鉄一本で繋がっているため、自然環境を整えたベッドタウン、南側は平均600mの背ぶり山系が繋がり、肉牛や酪農、豚や鶏舎が多数点在、高級

花卉の栽培、西側は佐賀県境で温泉施設や果樹園がある、

糸島市の農家の状況

◆農家数等の推移

資料：農林業センサス

	H7	H12	H17	H22
総農家数	3,137戸	2,870戸	2,656戸	2,425戸
専業農家数	629戸	551戸	545戸	545戸

◆農家の高齢化率 (H22)

	全国	福岡県	糸島市
	61.6%	58.2%	50.5%

◆糸島市における新規就農者数

H22	H23	H24	H25	H26
13 (7)	19 (9)	18 (7)	14 (5)	19 (4)

※()は農外からの参入者

農家の戸数が近年は大きく減少していない
新規就農者がある

新商品開発のきっかけ

九州大学との連携による 糸島の農林水産物を使った新商品開発
昭和 55 年頃 日向夏と甘夏柑の自然交配
平成 8 年に 「はるか」 として品種登録
はるか の生産状況 市内 21 戸
生産量 約 60 トン

農水産物を使った 6 次産業化の取り組み

はるかシリーズ クッキー ジュレ コンフィチュール
甘夏ドレッシング
海産物編 カキ ハマグリ あかもく 博多もずく

今後の課題

平成 23 年度より事業を開始し平成 26 年度まで 12 商品開発、販路拡大には生産量の安定供給が必要 平成 27 年度より商品開発は中断、売れ筋商品をセレクトしながら糸島市内、福岡市内に特化し販路開拓を推進

《所 感》

農水産物がたくさんある糸島市である。新商品を開発しても売れる物もあるが、売れないものができる。今後は市の予算で開発した商品に加え、農業者自身が独自に開発した商品を認定し販路開発する、と言われていましたが六次産業で地域を活性化、生産者の経営感覚の増進、努力のいる事業です。

【第 3 日】

大分県豊後高田市

人口：約 2 万 3 千人、面積：206、65 Km²

《視察項目》

豊後高田昭和の町づくりについて

《視察内容》

豊後高田市は大分県の北東部、国東半島の西側に位置し、西は宇佐市、東は国東市、南は杵築市と接した市である。平成 17 年 3 月 31 日に 1 市 2 町が合併

中心市街地は、昭和 30 年代は「おまち」とよばれその賑わいはピークを迎えた。しかし昭和 30 年代以降人口が減少し続け、全盛期には 300 店舗を数えていた町もシャッター通りとなり、ついには「商店街を歩くのは人よりも犬や猫ばかり」と表現されるほどの最悪な状態となる。

昭和 30 年代 大分県北部地区一円の集客
 昭和 40 年代から衰退へ 鉄道の廃止 人口減少 車社会の進展
 平成時代へ 郊外型大型店の進出

「昭和の町」の取り組みについて

目的 商店街が最も栄えた最後の時代であった「昭和 30 年代」をテーマに 3 つの柱を掲げ、商業と観光の一体化により商店街の魅力を高め活性化を目指す。

1. 昭和の建築再生 (昭和の街並み景観づくり)
2. 昭和の歴史再生 (店に残るお宝を一店一宝として展示 町や店の物語づくり)
3. 昭和の商品再生 (みせ自慢の昭和商品を一店一品として販売)
4. 昭和の商人再生 (お客さんとのふれあい、おもてなしの心づくり)

ご案内人制度

団体観光客等への対応として昭和の町を一時間かけて散策しながら案内案内人は、町の人たちで主婦やバスガイドさんなど一線を引かれた方。

昭和の町年間観光入り込み客数推移

年	入り込み客数 (人)	備考
H13	25,712	
H14	80,528	10月 昭和ロマン蔵オープン
H15	202,334	
H16	249,392	
H17	259,647	2月 昭和ロマン蔵東蔵昭和の絵本美術館オープン
H18	275,260	4月 昭和ロマン蔵南蔵旬菜南蔵オープン
H19	361,320	4月 昭和ロマン蔵北蔵昭和の夢町三丁目館オープン
H20	306,844	
H21	333,488	4月 昭和の町展示館本格稼働
H22	329,968	
H23	401,036	
H24	380,143	
H25	370,951	
H26	341,890	

近年は少し客数が低迷してきています。



ボンネットバス 年式 1957年（昭和32年）

平成21年7月ボンネットバスを導入し、走る広告塔として週末を中心に昭和の町を訪れる観光客を対象に市内周遊 観光案内人さんと一緒に

《所 感》

「豊後高田市観光まちづくり会社」を設立され、バックアップをされていますが、やはり商店主のやる気、意気込みが、ここまでさせたのだと考えます。

案内人の方が話されていましたが、中心になる人が大変御苦労され、商店主を引っ張って行かれたと話されていました。

何か一つ目指すものが出来れば、ここまで町おこしができるのだと改めて考えさせられました。

平成 27 年 7 月 24 日

小野市議会議長 前田 光教 様

民生地域常任委員会
山 本 悟 朗

行政視察報告書

先般、実施しました 民生地域常任委員会 行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成 27 年 7 月 8 日（水）～平成 27 年 7 月 10 日（金）

2 視察メンバー

高坂純子委員長 藤原章副委員長 川名善三委員 山中修巳委員
小林千津子委員 富田和也委員 久後淳司委員 山本悟朗

3 視察先及び調査内容

- (1) 山口県下関市（人口：276,000 人、面積：716.17K m²）
「ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について」
- (2) 福岡県糸島市（人口：99,000 人、面積：216.15K m²）
「農業農村 6 次産業化支援事業について」
- (3) 大分県豊後高田市（人口：23,000 人、面積：206.65K m²）
「豊後高田昭和の町づくりについて」

4 調査結果

【第 1 日】

山口県下関市

人口：276,000 人、面積：716.17K m²

≪視察項目≫

「ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について」

≪視察内容≫

野生獣による年間被害額が1.6億円程度も発生している同市では、野生獣の捕獲推進策の一環として、捕獲したイノシシ、鹿の肉を加工する施設を整備して指定管理者が運営する取り組みを始めている。

<下関市の状況>

① 野生獣の被害額（単位千円）

	シカ	イノシシ	サル
平成20年度	35,745	62,687	8,857
平成26年度	81,278	39,717	23,035

イノシシによる被害額は減少しているものの、シカ、サルによる被害が著しく増加している

② 野生獣の捕獲実績

	シカ	イノシシ	サル
平成20年度	931	769	42
平成26年度	1,360	1,047	48

被害額と比較して、イノシシは捕獲量の増加に伴い、被害額が減少している。

シカ、サルについては捕獲量は増加しているものの、獣の増加割合に追いついておらず、被害が増加している

③ 猟友会の構成と活動状況

狩猟免許の取得者の年代別割合は、全体人数540に対して

20代	6人（1.1%）	30代	21人（3.9%）
40代	28人（5.2%）	50代	54人（10.0%）

60代以上 431人（79.6%）となっており、若者ほど狩猟免許を取得しておらず、今後猟友会の会員は減少の一途をたどる見込み。

尚、26年度に活動した会員は288人

26年度に捕獲した獣の数2,455頭から1人当たり8.5頭程度捕獲したことになる。

<みのりの丘ジビエセンター>

目的 地域における有害獣被害の軽減

方法 捕獲した獣の肉を加工、販売することにより、捕獲者にとっての販路確保、拡大をはかり、有害獣捕獲を推進する。

対処獣 イノシシ、ニホンジカ

事業内容 捕獲されセンターに持ち込まれた獣を精肉、加工し、道の駅などで販売する。

事業実績 搬入個体数 平成25年度595頭 平成26年度546頭
搬入個体は全て処理され流通している。
販売が滞り在庫になることはなく、順調に推移している。

《所 感》

小野市でも有害鳥獣の問題が顕著化してきており、なにかよい解決策はないかとの思いから伺った研修でしたが、地域内に生存している鳥獣の数があまりにも違うことから、対応の仕方もおのずと異なり、ジビエセンターは当市では考える余地のないものだと感じました。

一方で、猟友会会員の減少と高齢化は同じ状況であり、若年層を取り込む為には、捕獲免許の修得補助もさることながら、捕獲個体の処分に躊躇することを念頭に入れた計画を推進しなければならない。

【第2日】

福岡県糸島市

人口：99,000人、面積：216.15K㎡

《視察項目》

「農業農村6次産業化支援事業について」

《視察内容》

糸島市では農林水産業者の所得向上と地域産業の活性化を目指し、「新商品の開発」「生産者の経営改革の増進」の二本柱で6次産業化事業を推進している。

＜糸島市の農業の実態＞

農産物別産出額の合計は159.5億円で、その内訳は

米 19.9億 いちご 16.4億 豚 14.1億 生乳 13.4億
花類 21.5億 鶏卵 10.2億 …… となっている。

糸島市は福岡市の南西に隣接する町で、福岡市への通勤圏であり、市の中心部から北西部にかけて、開発が継続中で人口維持ができている市でもある。

海にも面しているため、農業、漁業ともに盛んで、「福岡市の台所」の役割を果たしている。

一方で農業は、「担い手不足」と「高齢化」「取引価格の低迷」の問題を抱えている。

<6次産業化の取り組み>

新商品の開発

- 平成22年 市が音頭をとる形で、九州大学に依頼し
「農商工等人材育成事業研修会」を実施
「はるか」を使ったお菓子の提案を受ける
平成23年 開発したお菓子の販売を開始

生産者の経営改革の増進

未来を切り開く人材育成事業の実施

生産農作物の付加価値をあげる（ブランド化、加工の実施）ことにより、農家収入の安定、増加させるための、方策を学ぶ。

生產品の販路拡大の方法を学ぶ

平成24年度参加者 24名 平成25年度参加者 25名

《所感》

糸島市の農業の一番の強みは福岡市に隣接する所にありながら、農産物と海の幸とに恵まれていること。

一般的には、これらの場所での農業は、「新鮮さと糖度保持」を売り物にした「葉物、いちご、トマト」などの栽培が盛んになる。

兵庫県においても、神戸市西区、北区、播磨町、三田市などにおいては、「葉物」とトマトの栽培が盛ん。

糸島市においては、いちごの生産は多いものの、葉物の売り上げはあまり多くはない。

「生産者の経営改革の増進」は大切なことだが、まず、自分たちの地域の「強みと弱み」を判断し、強みを生かす経営改革が大切だと考える。

糸島市の農業においても、経営安定化の観点から6次産業化は必要だと考えるが、現場からの発生を行政が支援するのではなく、行政と大学が作成したプランを現場に落とし込んでも、良い結果にはならないものと感じる。

【第3日】

大分県豊後高田市

人口：23,000人、面積：206.65K㎡

《視察項目》

「豊後高田昭和の町づくりについて」

《視察内容》

中心市街地において、商業と観光の一体的振興をはかるため、中心市街地の商店街を昭和のまちなみに再現し、観光客の誘致をはかる。

＜取り組みの経緯＞

昭和30年代までは賑やっていた商店街が昭和40年代には衰退を始め、平成の時代には郊外型大型店舗の進出で完全に寂れてしまった。全国どこにでもある商店街のパターンを脱却する為、いっそのこと賑わっていたころの街を再現してしまおうというプロジェクトを実施

取り組みにあたっての4つのキーワード

昭和の建築再生 昭和の歴史再生 昭和の商品再生 昭和の商人再生

「ご案内人制度」の実施

1時間程度の時間をかけて、商店街を巡回案内してくれる「ご案内人」を設けている。観光客一人当たりの出費額は200円～300円程度（人数による）で、地元の方が「ご案内人」になってくれる。

＜取り組みの実績＞

入り込客数

平成13年 25,712人 平成15年 202,334人

平成19年 361,320人 平成23年 401,036人

平成26年 341,890人 と順調に客数は推移している。

商店での購入金額（アンケート結果）

2,000円未満 47% 2,000円～5,000円 38% と客単価はさほど高くはない。

売り上げのベースは 客数（34万人÷2）×客単価（3,000円）とみる で

5億円程度あると思われる。

《所 感》

観光政策としてはレトロブームの一環として実施されたものと思われる。多くの町でこれに類する取り組みが行われたが、失敗に終わった事例が多い。

豊後高田市は成功例として考えられる。

成功の要因は「ご案内人制度」と「昭和の商人再生」ではないかと私は考える。

電子ボイスによる案内やパンフレットによる案内では、レトロは感じにくく、旅の楽しみは半減する。やはりご当地の方との触れ合いが観光の楽しみとして大切だ。きすみの地区の観光戦略においても、「人の大切さ」をしっかりと中心に据えて推進していかねばならない。

平成27年 7月17日

小野市議会議長 前田 光教様

民生地域常任委員会

山中修巳

行政視察報告書

先般、実施しました民生地域常任委員会行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成27年 7月 8日（水）～平成27年 7月10日（金）

2 視察メンバー

高坂純子委員長、藤原章副委員長、久後淳司議員、富田和也議員、小林千津子議員
山本悟朗議員、川名善三議員、山中修巳 以上8名
随行者：富田守人課長

3 視察先及び調査内容

(1) 山口県下関市（人口：約27万4千人、面積：約715.9Km²）

有害鳥獣対策について

…みのりの丘ジビエセンター

(2) 福岡県糸島市（人口：約10万人、面積：約215.7Km²）

農村農業6次産業化支援事業について

(3) 大分県豊後高田市（人口：約2万4千人、面積：約206.6Km²）

昭和の町について

4 調査結果

【第1日】

山口県下関市

人口：約27万4千人、面積：約215.7Km²

《視察項目》

有害鳥獣対策について
…みのりの丘ジビエセンター

《視察内容》

面接者:議会事務局次長 植田功氏、議事課調査係長 亀田和輝氏
農林水産振興部農林整備課課長 上野晃氏
農林整備課有害鳥獣対策室室長課長補佐 来島弘幸氏

市役所は昭和30年築で、平成26年から新庁舎を建設中である。旧庁舎は耐震補強をして残し、都合9階建の新庁舎と旧庁舎(写真参照)になり、総事業費は70億円とのことである。因みに、新庁舎の7階から9階が議会のフロアとなっており、エレベーターは7階で一端降り8～9階へは乗り換えをする構造になっていた。セキュリティのためとのこと。



さて本題にはいる。

有害鳥獣被害は平成26年度で1.6億円、捕獲頭数は約2,500頭となっている。市では猟師さんの処理の手助けのため、2年前に5,600万円(内国費補助2,700万円)を投入し、ジビエセンターを設立した。以下、

有害鳥獣防止対策と「ジビエセンター」について記す。

〈有害鳥獣対策〉

- 被害総額1.6億円、捕獲頭数は数年2,500頭前後となっており、深刻な悩みである。
- 狩猟免許人数は456名、内銃免許所持者は207名であるが、60代、70代の高齢者が大多数である。
- 捕獲奨励金
 - (1)イノシシ 5,000円
 - (2)シカ 10,000円
 - (3)ノウサギ 200円
 - (4)カラス 400円
 - (5)サル 26,000円
 - (6)タヌキ 1,000円
 - (7)ヒヨドリ 200円

鳥獣被害対策実施隊を設置しており、報酬は年額2,000円と出動時の旅費を支給している。

○わな・柵への補助

わな等の補助はない。

柵は国の補助のみ。但し、国の補助にのらない受益戸数2戸以下の人には市が3/4の補助をしている。

〈みのりの丘ジビエセンター〉

○猟師が使える施設として、2年前に5,600万円を投じて設置した。…肉の精度維持のため、1時間以内に処理することが基本である。

○施設の管理は指定管理者制度で行っており、管理費は534.9万円/年。現在、肉屋さんが入っており、肉の買い取りも行っている。

○施設での年間処理頭数600頭(イノシシ310頭、シカ290頭)。

○ジビエ肉の価格は輸入牛肉の6割増し。リーズナブル?

○市の関わりとしては、幟の作成、試食会、料理教室の開催等である。



〈課題〉

・近年、イノシシが減り、シカ、サルが増加している。特にシカは何でも食べるので、箱穴等のわなが効かない。(惹きつける餌がない。)

〈所感〉

シカ、イノシシ、サルが下関市の3大野生獣となっている。この内、被害額においてイノシシが減少傾向となり、シカ、サルが増加してきて、この対策に頭を悩ませておられる。イノシシ、シカについては「みのりの丘ジビエセンター」を公費でつくり、対策されている。センターの目的は猟師さんが捕獲後の処理をし易くするためのもので、管理は指定管理者がしている。指定管理者は肉屋さんでセンターの管理と肉の買い取り、解体請負なども行っている。センターでの処理数は600頭もあり、小野では二桁ぐらいの捕獲数であり、センターのニーズはないと思われる。

シカ、イノシシをソーセージ、ハムなどつくって試食会などを実施しているが、イノシシに比べて、シカは売れないようだ。特にシカ肉の料理方法の検討とシカの増加防止を考える必要があるだろう。

ただ、小野市も増加傾向にあり、ジビエの処理、販売等については、検討していく必要があると思われる。

【第2日】

福岡県糸島市

人口：約10万人、面積：約215.7Km²

≪視察項目≫

農村農業6次産業化支援事業について

≪視察内容≫

面接者：議会事務局議事課課長 小金丸敏浩氏、西正文氏

産業振興部農業振興課長 岩永剛彦氏

産業振興部農業振興課農政係長 平野治氏

JR博多駅から西へ地下鉄に乗って30分強で糸島市のJR筑前前原駅に着く。周りは住宅地で、人口も年々増加傾向にあり、博多のベッドタウン化していているようだ。

市北東部に九州大学の伊都キャンパス(275haあり、内糸島市は32ha)があり、平成31年には完全に移転し、約18,000人の学生と教職員が糸島市周辺に住むことになる。

以下糸島市の6次産業化について記す。糸島市は「新商品開発」と「生産者の経営感覚の増進」の2本柱で推進している。

〈新商品開発〉

- ファーマーズマーケットJA糸島「伊都菜彩」は年間売上37億円、年間来客数130万人である。JA糸島「伊都菜彩」を含め、19箇所ある農畜産物・海産物の売り上げは53億円である。人口10万人の市としてはすごい数字である。
- 糸島市で生まれた柑橘「はるか」の加工を中心に、新商品を開発し、ブランド化に取り組んでおられるが、苦戦しておられる。従来の新商品開発から今後は販路拡大に力を入れたいとのこと。
- 九州大学との連携事業として農商工等人材育成事業研修会の開催等を実施している。

〈生産者の経営感覚の増進〉

- 農水産業者の所得向上を目指し、人材育成事業に取り組んでいる。
予算 平成24年度約1,170万円(補助金370万円含む)
平成25年度 400万円
- 事業は研修が中心で、基礎研修(座学)、実地研修(海外・国内)を組み合わせ実施している。(海外研修の補助は約半額)
- 新規就農者に支援している。1人に付き月額3万円、受け入れ農家に月額2万円。

〈課題〉

ご多分にもれず、担い手不足、高齢化、耕作放棄地、取引価格の低迷、糸島ブランドの確立などをあげられていた。

《所 感》

J A糸島「伊都菜彩」の売り上げ37億円を初め、19箇所の売り上げ合計が53億円あるというのはすごい数字である。九州大学が完全に移転するとのことで、人口増と大学の助言がもらえるという好材料があり、羨ましい限りである。J A糸島「伊都菜彩」を見学できなかったのは残念であった。

小野市は販売箇所として、ひまわりの丘公園、白雲谷温泉ゆびか等があるが、販売力が弱く、またオリジナル商品も少ないと思われる。J Aに販売力強化、オリジナル商品開発のための農家への指導等を要請する必要があると思われる。



【第3日】

大分県豊後高田市

人口：約2万4千人、面積：約206.6Km²

≪視察項目≫

昭和の町について

≪視察内容≫

面接者：市議会議長 安達隆氏

議会事務局主幹兼庶務係長 次郎丸浩一氏、主任 西田巨樹氏

説明者は議会事務局が行った。視察研修が多く、当局だけでは対応できないため、市議会等の視察研修は議会事務局が行っているとのことである。研修は現場が中心であり、現場での説明はボランティアの案内人がおられるため、特に問題はなかった。

以下、研修内容について記す。

1. 「昭和の町」のまちづくりの背景

- ① 商工会議所が、大手広告代理店に依頼し、再生プラン「豊後高田市商業活性化構想」を平成5年に作成したが、巨額の予算がかかる施設建設が中心だったため、お蔵入りとなった。
- ② 平成4年に商工会議所が中心となり、「豊後高田市商業まちづくり委員会」を発足し、中心市街地の個性を探しだすため、数年かけて、歴史調査をした。平成8年に「豊後高田市市街地ストリート・ストーリー」を完成させ、この中で「昭和」のテーマにたどりついた。
- ③ 平成11年には商業者が「既存商店街再生研究会議」を結成し、会議所、市役所のスタッフもはいる、議論していった。平成12年、商店街の町並みと修景に関する調査を1年間かけて実施し、商店街の7割が昭和30年以前の建物であることがわかった。



2. 「昭和の町」の取り組み

商店街が最も栄えた「昭和30年代」をテーマにし、3つの柱と4つのキーワードをかかげた。

○3つの柱

- ① 商店街の各店の4つの”再生” 「昭和の店」と昭和の町のコンセプトを観光客に伝える「御案内人制度」
- ② 中心市街地に眠っていた”米蔵”を活用した豊後高田昭和ロマン蔵などの「観光拠点施設」等
- ③ 昭和の町での様々なイベント

○4つのキーワード

- ① 昭和の建築再生(昭和の街並み景観づくり)
具体的にパラペットで覆われた看板等を木製やブリキ製の「昭和の看板」に改修した。改修費の2/3を補助した。
H13～H26で事業費総額 8,136万円、延べ修景店舗数 53件
- ② 昭和の歴史再生(店に残るお宝を一店一宝として展示し、町や店の物語づくり)
展示のための費用補助は1/2。
H13～H26で事業費総額 322万円、補助店舗数 29件
…実際、江戸時代に嫁いで来られたときの駕籠、古い餅つき機など興味深いものが多く展示されていた。
- ③ 昭和の商品再生(店自慢の昭和の商品を一店一品として販売)

昭和の手づくり
アイスクャンデー、オカラのコロッケなど楽しく、美味しい商品が多くあった。

- ④ 昭和の商人再生
(お客さんとのふれあい、おもてなしの心づくり)



3. ご案内人制度

団体観光客等を対象に「案内人」が約1時間かけて、商店街と商店の歴史などを語って聞かせる。案内するメインの商店街は約500mなので、歩くだけだと10分で終わる。…案内人はリタイヤした人で約6人おられるとのこと。話が上手で昭和の町の人気を高める要因となっていると思われる。

4. その他

- 1) 昭和の町の拠点施設となる昭和ロマン蔵
- 2) 昭和の町展示館
- 3) ボンネットバスの導入…クラシックカーなども多く展示されている。

4) 様々なイベント

- ・ ホーランエンヤ
- ・ 昭和の町レトロカー大集合
- ・ 仏の里・昭和の町豊後高田五月祭
- ・ 昭和の町打ち水大作戦
- ・ 高田観光盆踊り大会他

《所 感》

昭和の町は平成13年からスタートしている。平成15年にも当地を訪れているが、当時と比較すると随分いい方向に進化していた。コンセプトがきちり行き届いており、景観も良くなり、案内人がかなり貢献していると思われる。因みに平成14年度の入込み客数は8万人であった。平成19年以降は30万人以上の観光入込み客数を維持しており、平均3,000円以上使っている。

商店街では、店主の方は皆生き生きしていた。一店一宝、一店一品などの説明は全て案内人がし、店主は説明を求められたときのみなので、観光客からすれば爽やかで、買い物し易い環境だと感じた。

小野商店街も参考になる部分が多々あると思われる。



平成27年 7月16日

小野市議会議長 前田光教 様

民生地域常任委員会
川名善三

行政視察報告書

先般、実施しました 常任委員会 行政視察の結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 視察実施日 平成27年7月8日（水）～平成27年7月10日（金）

2 視察メンバー

高坂純子・藤原 章・山中修己・小林千津子・山本悟朗・富田和也・久後淳司

3 視察先及び調査内容

(1) 山口県下関市（人口：約27万6千人、面積：716.17Km²）

ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について

(2) 福岡県糸島市（人口：約9万9千人、面積：216.15Km²）

農業農村6次産業化支援事業について

(3) 大分県豊後高田市（人口：約2万3千人、面積：206.65Km²）

豊後高田昭和の町づくりについて

4 調査結果

【第1日】

山口県下関市

人口：約27万6千人、面積：716.17Km²

《視察項目》

ジビエ有効活用推進事業及び有害鳥獣対策について



≪視察内容≫

1) みのりの丘ジビエセンターについて

イノシシやシカをはじめとする鳥獣による農林作物被害の平成26年度の被害額はシカが約8,100万円、イノシシが約4,000万円、サルが2,100万円となっている。これら有害獣(シカ・イノシシ)の捕獲意欲の向上を図るとともに、埋設処分等の負担を軽減することを目的として平成25年4月に設立(下関型ジビエ有効活用モデル)。捕獲したイノシシ・シカを食肉として加工し、下関市の地域資源として有効活用し、地域ぐるみの有害鳥獣被害軽減対策機能を果たすことが期待されている。

・年間処理頭数

イノシシ	310頭	
シカ	290頭	合計600頭/年

・加工商品(12品)

○シカロースブロック ○イノシシスライス肉(ロース) ○イノシシ・シカミンチ
○イノシシメンチカツ ○シカミルフィーユカツ ○シカフランクフルトなど
平成25年5月よりみのりの丘売店、道の駅西の市、道の駅豊北などで販売



2) 有害鳥獣捕獲について

①捕獲奨励金(1頭当たり)

- ・イノシシ5,000円・ニホンシカ10,000円・サル26,000円
- ・ノウサギ200円・カラス400円・タヌキ1,000円・ヒヨドリ200円

②狩猟免許取得者

現在456名、免許取得の補助金として県が銃67,000円、わな15,000円を補助しており、市としては講習会への参加者に会場までの旅費を支給



≪所感≫

広大な山間地域を抱え、鳥獣被害が深刻な下関市にとっては、捕獲者への捕獲鳥獣の処理の

軽減と食肉資源としての活用を図る施設としてのシビエセンターは重要な施設となっている。運営については指定管理者に委託するなど、工夫を凝らした取組が行われていた。今後は有効な捕獲方法の確立や現在でも割高といわれるジビエ加工品をいかに普及させるかが課題と言われていたが、これらは全国共通の課題でもあり、全国的な情報交換の必要性を感じた。

【第2日】

福岡県糸島市

人口：約9万9千人、面積：216.15Km²

≪視察項目≫

農業農村6次産業化支援事業について

≪視察内容≫

糸島市で生産される産品を加工することにより、産品の付加価値を高め、市内農林水産業者の所得向上と地域産業の活性化を図ることを目的として新商品の開発を推進している。また、耕作放棄地の再生や雇用創出、観光振興などへの波及効果を見込む。平成22年に糸島市と九州大学との間で、共同で地域開発に取り組む協定書を締結、市民対象とした農商工連携研修を開催するに至った。

1) 地理的条件

福岡県の最西端に位置し、北は玄界灘に接し9か所の漁港は県下最大の水揚げを誇る。また、北は農地が広がり酪農や花栽培も盛んな地域であり、東は福岡市に隣接、都心まで地下鉄で直接結ばれ、ベッドタウンとしても利便性に富む。

日本一の売り上げを誇る農産物直売所、JA糸島「伊都菜彩」をはじめとして、市内には19か所の直売所が所在する。

2) 経緯

平成23年度より糸島市長期総合計画の基本目標「地域資源を生かした産業創出のまちづくり」を達成する事業として開始

平成23年度は糸島発祥の柑橘「はるか」を使用したお菓子4品を開発

平成24年度は糸島産品を原材料として、農産物から「甘夏」、畜産物から「豚肉」、水産物から「鱈」を使用し商品化



平成25年度は「甘夏ようかん」、「サザエ飯の素」を開発
 販路は地元農産物直売所「福ふくの里」を中心として、小田急百貨店、ネット通販「糸
 島よかもん市場」に出店している。



3) 課題

平成23年度よりこれまで12商品を開発するも、開発商品の売り上げが見込めなければ、生産者の所得向上につながらないことから、今後は販路開拓を中心に事業を進めるとのことである。平成27年度からは商品の安定供給を図る為、第1次加工所の整備と売れ筋商品の市内及び福岡県下に特化した販路開拓を目指している。

《所感》

課題として、販路開拓を強調されていたが、強力なJAとの連携や、早くから九州大学との産学連携が取り組まれており、自然にめぐまれ、消費地としての福岡市という大都市に隣接するという6次産業化を目指すには好条件の地にあり、今後の商品開発の進め方によっては、さらなる拡大が期待される。

【第3日】

大分県豊後高田市

人口：約2万3千人、面積：206.65 Km²

《視察項目》

豊後高田昭和の町づくりについて

《視察内容》

豊後高田市の商店街は、江戸時代から明治、大正、昭和の30年代にかけて国東半島一の賑やかな「お町」として栄えたが、昭和30年代以降、人口が減少、昭和40年に鉄道が廃止され、車社会の到来により、かつての賑わいもなくなり、商店街の空洞化が急速に進んだ。豊後高田市の「昭和の町」は、平成13年からの取り組みによる、昭和3



0年代の賑わう商店街を蘇らせようという町づくり。昭和10年頃に米蔵として建てられた旧高田農業倉庫を改築した「昭和ロマン蔵」と、「昭和」の再生をめざす「昭和の店」が立ち並ぶ商店街で形づくられている。

1) 経緯

- ① 平成4年度「豊後高田市商業活性化構想」の策定
予算的に無理となり頓挫
- ② まちの個性探し、テーマ探し
「昭和」をテーマとし「既存商店街再生研究会議」を結成
- ③ 「まちなみ実態調査」の実施
平成12年度に「商店街街並みと修景に関する調査事業」を実施

2) 昭和の町商店街の4つのキーワード

- ① 昭和の建築再生
アルミ建具を木製に復元するなど、商業者の負担が1/3になるように市などが補助金を支給
- ② 昭和の歴史再生
店に残るお宝を一店一宝として展示、町や店の物語を作る。
- ③ 昭和の商品再生
店自慢の昭和商品を一店一品として販売
- ④ 昭和の商人再生
昭和30年代当時の、お客と店主が直接対話し、当時のもてなしを行う。



《観光客で賑わう商店街》

昭和の町散策ご案内

昭和の町とは、
総延長50mの通りは普通に歩けば15分かかりませんが、その通り沿いに点々と立ち並ぶ「昭和の店」の一軒一軒を訪ねてみましょう。昭和の思い出をさがして、昭和の建物に足をとめ、一店一品を目をとめ、一店一品を手にとり、そして笑顔でお客様と語らう昭和の商人に心をこめていただければ、いつの間にかやさしくなつかしい昭和の時間が流れ過ぎているかもしれません。

お帰りなさい。思い出の町へ。

昭和の町展示館

- 昭和の町に建てられた展示館とつながる建物で、元は米倉分府前、高田農産物直売所と、倉庫を改築して活用されています。
- 少人数のグループ専用として、昭和の年号から昭和9年12月まで10年間の大分各新聞(朝)もご利用いただけます。
- 昭和の町オリジナルグッズも販売しています。
- 昭和の町お宝展示館で9:00～17:00まで展示しています。
- ★ 観覧時間 午前10時～午後3時 ★ 休館日 不特定

昭和ロマン蔵

「昭和の町」ご案内所

- 昭和の商店街ゾーン(無料施設)
- 昭和夢町小学校(無料施設)

- ★ 昭和の夢町三丁目館 休館日/不定休 営業時間/9:00～17:00
- ★ 駄菓子屋の夢博物館 休館日/不定休 営業時間/9:00～17:00
- ★ 昭和の絵本美術館 休館日/不定休 営業時間/9:00～17:00
- ★ レストラン 旬彩「南蔵」 休館日/不定休 営業時間/11:00～17:00

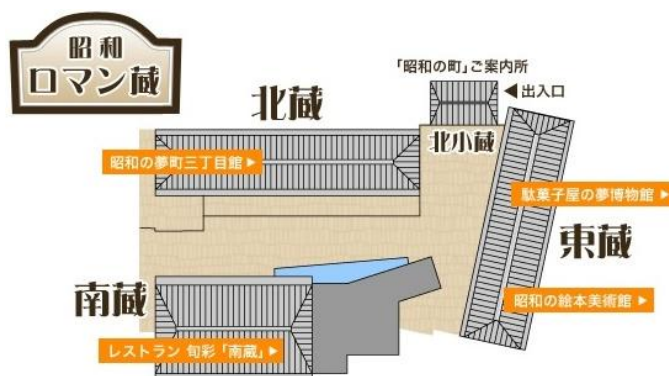
3) ご案内人制度

団体観光客への対応として、案内人が約1時間かけて一緒に散策し、商店街の歴史などを語り聞かせる。案内人の面白さが評判となる。

4) 「昭和ロマン蔵」

昭和10年前後に明治から昭和にかけて大分県きっての富豪と言われた「野村財閥」が、米蔵として建てた旧高田農業倉庫を「昭和ロマン蔵」として改築。

「昭和の町」では、米蔵を「昭和ロマン蔵」と命名、平成14年に「駄菓子屋の夢博物館」、平成18年に「旬彩南蔵」、平成19年に「昭和の夢町3丁目館」として整備した。



《所感》

「昭和のまち」年間観光客の入れ込み数は、近年減少ぎみと聞いていたが、今回我々の視察は、金曜日の午前中にもかかわらず、団体客が数台の観光バスで訪れており、「ご案内人」も数名でガイドを行っていたのが印象的であった。商店街そのものを観光資源として活用するこの取組は、商店街の再生が全国共通の課題であることから、工夫次第で活性化できることを実感した。



《南蔵にあるボンネットバス》



《昭和40年代の自動車を展示する北蔵》